

父親家庭教育学級へのとりくみ

川崎市菅生子ども文化センター

針山直幸

- 一 土台
- 二 動機
- 三 同意
- 四 酔い
- 五 評判
- 六 波紋
- 七 後援
- 八 独立
- 九 その後

一 土台

川崎の北部、宮前区のはずれで多摩区との区境いに位置する菅生地域で、昭和五十七年十月～五十八年一月にかけて、父親家庭教育学級が開かれた。

まだまだ緑が多く残り、田畑が所々に点在する菅生の地は、南武線溝の口よりバスで約三〇分の新興住宅地である。人々が、公害をのがれ、子育ての環境を求め、この地を選び移り住んだのは、昭和四十年頃、約二〇年前から始まった。子育ての環境を求め、自然を求め移ってきたはずであった住民は、自然だけでは子

育てはできず、文化を欲した。

文化は、図書館であり、公民館であると思っただけは、子どものための施設作り運動に立ち上り、約一〇年間の歳月を費やし、児童館（川崎では、子ども文化センターと称する）設置にこぎつけた。

昭和五十年五月、住民の期待を背負った菅生子ども文化センターは開設した。開設以来、父親家庭教育学級が開かれるまで、約八年の経過があるが、その経過があるからこそ、父親家庭教育学級が開かれる土台ができたのではないか。この八年間、子ども達から「子ども文化センターは、大人文化センターだよ」

とささやかれるくらい、母親達の出入りが多い児童館であった。児童館設立運動は、母親達にとって、子育て運動であったわけで、子育て運動は、児童館の設立実現で終了するはずは無かった。終了どころか出発点であったのだ。そして、子育ては、他人に委ねるのではなく、地域に住む一人一人の自覚と連帯が必要であることを、施設を基盤に実践していった結果が「大人センター」であった。

一例をあげると、幼稚園就園前の三、四歳児を週一回保育し、集団になれさせようと始めた幼児クラブでは、当初、保育資格を有する人を依頼し開始した。だ

が、母親達がわが子がどの様な保育を受けているのか知りたい、カリキュラムがわかれば、週一回の保育を家庭と協調してより豊かなものにしていくことができると保育者に対してカリキュラムの提示を求めた時、カリキュラムは有資格者専有のものとして拒絶した。その拒絶に対し、再三にわたって母親達は説得を重ねたが、有資格のプライドは、かえってかたくに門を閉ざした。それなら、誰に委ねるのではなく母親達自身が保育者になろうと立ち上がった。そうした中には、通信教育で資格を取得したりした人もいて、努力といきごみは並々ならぬも

のであった。母親保育者は、毎回毎回のカリキュラムと打合わせに、遅くまで残って次回の準備にとり組んだ。

幼児クラブを始めとし、地域の子ども達に良い本をとるの目的で、図書貸し出しをしている読書クラブ。母親達の学習会等々、母親達の出入りが多い。子ども達にとつて、こども文化センターに来れば、知っている近所のおばさんがおり、地域を歩けば、こども文化センターで見たとおばさんにおちあたる。大人文化センターと、こども達が言う理由である。

決して、子ども達の利用率が低いわけではない。こども文化センターを中心に、地域の教育力が上昇した結果としての現象であるのではないか。こうした地域の教育力は、施設建設運動の歩みから培われ、開館以来約八年間で更に広がりを見せ、父親家庭教育学級開催の土台となったものと思われる。

二——動機

私事である。自分の父が定年退職する時期がやってきた。再就職をするかしないかを決定しなくてはならなかった。父は迷わず、再就職の道を選んだ。まるで、それが当然かのように……仕事一筋できた人から、それをとつたら何も残らないという言葉を自他とも認めた。

働きつくめでやってきた父。多少熱があるが会社を休むことなく、休暇等はもつてのほか、わが子の日常の教育は母親の役割と信じ込み、自分こそが会社に無くてはならない存在と自ら決めつけ、日曜も会社優先に過ぎてきた典型的な高度経済成長を負った日本人。

そうした父が自分の定年という人生の岐路に立った時、また再び馬車馬の道を選ぶという実体を目の当たりに見た時、同性として哀感の念を抱いた。

一方、私が勤務していた菅生こども文化センターでは、母親達が嬉々として子ども達のために活動したり、女性のライフサイクル、女性の生き方を論議している。もつと地域に目をむけると、カルチャーセンターを始めとした趣味の教室が乱立し、テニススクール等で汗をかく主婦達。きつと亭主達は今頃会社で上役におこられているかも知れないと思いつつ、そうした主婦の姿を見ると男があわれになっていく。

「女」が封建制度の名残りによって抑圧され、それによってひき起こされるさまざまな問題解決のために学習し実行するならば、「男」がただ男と生まれたばかりに働くことが当然で、よりいならば競争社会に落ちこぼれた男は、人格までもが否定されんとする世の中に、自分のことも顧みる暇もなく一生を過すの

は、もはや考え直さねばならない時にきているのではないか。もし、この文が女性研究家等の目にとまったら激怒されることと思うが、父親家庭教育学級を始める直前、そんなことを考えていた。

折りしも、社会教育の分野で菅生地域を担当している高津市民館より、家庭教育学級を地域で開催しないかとの声がかかった。今、自分の考えていたことを市民館の学級担当者に話し、家庭教育学級はほとんどが母親が対象だが、ぜひ、父親対象の学級を開催したいと申し出たところ、そうした企画に乗って下さり、ぜひやっていこうということになった。また、こども文化センター側の上司にも、企画を認められ、夜間開設の運びとすることができた。

三——同意

開設に向けて企画は進んでも、参加者が得られなくては学級として成り立たない。

こども文化センターを訪れるのは母親ばかりで、どうしたら父親達の同意を得ることができるのか。初めての試みでもあり、直接に呼びかける手がかりはなかった。まず、最初に同意を求めたのは母親達である。企画をした動機、父親にも学ぶ機会を、と呼びかけたところ、諸手

を上げての賛成が得られた。

『私が買物に行くと、いっつもくっついて来て金魚のフン。最近はずいぶんにも相手にされないからおさらよ』『息子が中学生になろうとしていて、これからは父親の出番と思う』『男の自立なくして、女の自立はないと思う』『エッ父親が学習するの。おもしろそう。のぞいてみたいワ』

父親家庭教育学級に対し、母親達の思いやら願いは千差万別であった。しかし、さまざまな思いの中で、口をそろえて「必要」と語られた。では、御亭主にせひ出でいただきたいとお願ひする段になると、「うちの忙しさをかたしらす」「はずかしがりやだから」とくる。まあ、そこを何とか話してみて下さいとお願ひし、二三日たつて結果を聞くと良い返事ではない。それでは、私に直接おはなしさせて下さい。ぜひ、機会だけでも与えて下さいとお願ひし、一升瓶つまみを持参しての父親達への直訴まわりであった。

しかし、父親達に対して同意を求める直訴であったはずであるが、同意は得にくいものであった。何よりも、誰もが働くことは別に何も思わず、当然の結果としてるのであり、いや、それよりもむしろ誇りとしている父親陣営に対し、向う刃はなかった。実は、説得者自身が、

自身の仕事に対して誇りを感じてしまっていたからでもある。

もう学級は開設できないかと思いはじめた頃、父親陣営からの逆提案があった。父親としての子育て、父親としてのあり方はどうか。男の学級よりも、父親としての学級の方が魅力があるとの意向であった。

とにかく、父親達が集まる機会が作られることが何よりのきっかけであろうことを思い、重い腰を隔週土曜日にあげていただき、開始していく運びとなったのである。

四——酔い

父親達の集まりであるから、舌の潤滑油程度のお酒と、若干のおつまみを用意して学級の開講式の日を迎えた。この試みはとても良いとの評価を受け、学級の風習として定着する。

七時頃に、運動着にくつろいで、あるいは仕事帰りの途中に背広姿などで、初めて父親家庭教育学級に集まった父親達十数人。

何を話して良いのか、ただ資料に目を落とし、隣りの人と時候の挨拶をしても二言三言で重い空気が流れる。どこに目をやれば良いのだろうかと所在なさげに背を丸めている父親達。

父親家庭教育学級学習プログラム

回	月日	曜	学習課題	学習内容	方法・形態	教材教具	指導助言者
1	10/2	土	開講式 オリエンテーション	家庭教育学級とは 自己紹介とこの学級に 期待するもの	説明 話しあい	16ミリフィルム 「ぼく学校 きらい」	高津市民館 菅生こども文化センター
2	10/16	土		今のこども、昔のこども 「今の若い者は……」	レポート発表 話しあい		学級生
3	10/30	土		男の子育てを語る 父親母親の役割を考える 「こども野球の監督・ コーチの経験から」	レポート発表 話しあい		学級生
4	11/13	土	現代のこどもと 親子関係	こどもの問題行動と父 親母親～教育相談の事 例から～	講義 話しあい		市教育研究所 栗原邦夫
5	11/27	土		家裁の窓からみた、こ どもの非行と親子関係	講義 話しあい		横浜家裁・調停委員 川井喜久子
6	12/4	土	地域の教育力と	こどもの非行と地域の 教育力	講義 話しあい		一橋大学教授 藤岡貞彦
7	12/18	土	父親の役割	企業の合理化の中の父 親とこどもの問題	レポート発表 話しあい	「積木くず し」 「経済評論」 「中央評論」	学級生
8	58 1/8	土	婦人の自立と 男の生き方	女のライフサイクルをと おして、男の生き方の 方向をさぐる	講義 話しあい		評論家 吉武輝子
9	1/22	土	地域社会の中で 男が担う役割とは	男の自立と地域	講義 話しあい		横浜市立大学教授 越智 昇
10	2/19	土	閉講式 評価・反省	さよならパーティー これまでの学習のま とめと今後について	話しあい		高津市民館 菅生こども文化センター

(時間) 午後7時～9時

生まれてこの方、「学級」などとは、全く無縁で過ごしてきたであろうこの父親達であるからして無理はない。

いよいよ開始……

自己紹介と共に、学級へ参加した動機が話された。「女房にしつこく勧められて仕方なく」「義理で」「もうこれ以上夫婦喧嘩をしたくないでしね」

学級が開始され、暫くして遅刻者が入って来る。もうすでに自宅であおつてきたらしく赤い顔をしている。「何か今更学級だなんてテレクサくて……酒でも飲まんとして来れませんでした」と言う。父親家庭教育学級の明日はもはやなく、悲観的な発言が続く。しかし、遅刻者の発言のとおり、照れ臭い、なじまないうというのが本音であったのだろう。

自己紹介をしても、地域とのかかわりになると、必ず女房を持ち出さなくては自己を語れない。つまり父親は地域に不在で、自己を自分だけで語れないのである。『この、こども文化センターの○○クラブに女房は行っているらしく、○年生と△年生の子どものお世話になっているはずですよ』という具合にでしか話ができない。そんな自分を地域の中に引き出すのだから、酔いの力でも借りなくては学級へは足が向かなかつたのである。

五——評判

さて、父親家庭教育学級が始まってみると、実に妻側からの評判が良いのである。

「学級から夫が帰ってくるともう大変。学校から帰ってきた子どものように頬を紅潮させて、学級であったことを話すんですよ。おかげさまで、夫婦の会話ができるようになりました」「日曜だというと、テレビの前で酒を飲んでゴロ寝だったのに、子どもと遊ぶようになったんですよ」「今まで、子どもの話をしてもらい剣さがなかつたんですが、最近はまだものに聞いてくれるんです」

そんなことを小耳にはさんだと父親達に話すと、父親達は一樣に照れながら、決して妻側の言葉は肯定しようとはしない。

「俺は変わったのではない。子どもと父親と接しなくてはいけない時期にきただけのこと。成長に合わせて接し方を变えただけだよ」「夫婦の会話はもたらさ。前は共通の話題が少なかっただけじゃないの」

父親達は、平静を装い、自分達は何も変わっていない、学級にもそれほど関心が向いたわけでもないという顔をして物静かに語る。しかし、それほど学級に興味がなかったのでしょうか。

否。学級の時間は夜七時から九時までと一応なっていたが、九時に終わった試しがない。延々と夜半一時間過ぎて話はずきず、まだ話したりないという気持ちで帰るのをやむなくしていた実態から鑑みて、父親達は、学級がいやでたまらなかつたはずはない。

そんな時間に夫が帰り、まだ話したりないとはばかりに妻に語りかけたのである。それから、さぞ大変だったことと察し申し上げるよりない。最後に妻側からの評をひとこと書きそえると「父親学級が土曜日で良かったわ。夜遅くまで話を聞いてあげて、あくる朝、いつもと同じように起きるんじゃないね。次の日は日曜日ですもの。寝ぼりできるから聞いていられるのよ」

六——波紋

学級が開始してから、地域の顔も若干の変化が見られはじめた。学級生が二〇人程度しかいないので、変化といってもささいなものである。学級生の父親達が地域を歩き始めたのである。

小学校の体育館を借りて、「菅生に良い文化を」と母親達が企画して「はだしのゲン」の映画会が催された。土曜日の午後、小学校の体育館を埋めつくした六〇〇人の人達。その中に三人の学級生の

父親の顔があつた。

平日の夜、小学校の教職員組合が主催して地域の教育論議が開催された。母親達がほとんどの中、わずかの父親達が出た。そのわずかの父親達の中に学級生もまたいた。

学級生達は、そうした中で重要な役割を果たしたわけでもなく、何一言、発言したわけでもなかった。ただ、ただメモをとっているだけであつた。

しかし、PTAがママさん会に変貌してしまつたことが全国各地の問題となっている時、わずか小砂利の一石かもしれないが父親が、そうした機会に顔を出したという波紋は評価に値しまいか。一つ学級に参加するという行動は、父親達に地域に進出することに対しての照れと、仕事をしているのが何よりも男らしいことという威厳を一挙に取り去つたのである。

この一石の波紋が、どのような模様を画くか、あるいは消えてしまふか、地域の長い歴史の中で結論を待たなくてはならないと思う。わずか一〇回シリーズの学級は、いきなり地域を直撃するような特効薬的機能を発揮するとも思えない。また直撃でもしたら奇妙なものでもある。漢方薬のようにいつしか、どこからともなく効果が表面化する、そうした気持でいるのは自己満足であろうか。

ともすると、行政効率という名目で即効を期待しがちであるが、こと地域変革という問題は気の長い話でなくてはならないのではないか。前述の「土台」の項で、学級開設の土台として二十数年間が地域の潜在であるとすれば、土台にそれだけの年月が必要だったわけで、それから考えても、これからはまた長い年月が必要という証明にならう。

七——後援

男が学ぶ機会を得て、夫婦の会話、共に子育ての問題が考えられるようになる等の評価を得て、企画者として何よりも喜ばしいのは、夫婦喧嘩までして下さって始まった学級だから、この学級によって、より夫婦円満になっていってもらうことである。

学級が開始されて、わずか二回目ぐらいいだったと思う。「おやじの学級後援会」なるものが結成された。学級生の妻達有志によってである。

①男の人は仕事の都合で欠席することがしばしばあるので、欠席しても様子がわかるように「おやじ通信」を発行する。
②疲れて来るのだから、せめてお酒のおつまみぐらい、妻の私達の仕事としてやっていきたい。

③縁の下の力持ちで、大和撫子の域を脱

しないようお手伝いしたい。
との申し出があり、心よくお願い申し上げる。

だが百戦錬磨でたたきあげている妻側のたくらみとは露知らず、その内に、「あの先生のお話をぜひ聞きたい」と言い出し、夫側に「後の方でひそやかに聞いていなさい、男の学級なのだから」と威厳をそこなわない「お墨付き」を頂戴する。そして、いつしか自称大和撫子達は、夫の隣の席に、しっかりと寄りそってしまつたのである。

父親家庭教育学級は、いつしか夫婦家庭教育学級へと変貌していった。そのための女性の努力たるや大変なもので、何しろ夫婦そろって夜出てくるためには、どうしても子どもがネックになる。夜と

いっても並の夜ではなく、夜半になることもしばしばあるのである。まず、子ども達を月曜日から、目いっぱい体を動かさせ、土曜日に、小学校、幼稚園から帰ったらお昼寝がしたくなるようにしておく。子どもがお昼寝をしたら、自分も夜にそなえてきちんとお昼寝をする。といった具合に努力するわけである。

後援会が、決して本流にはなっていないが、男の学級が、いつしか夫婦の学級になり、そしてまた子づれの学級というようになっていった。これ皆、大和撫子のたくらみであり、なせるわざで

ある。

八——独立

閉講式を迎える頃、学級は夫婦連れで倍にふくれあがったかというところまでではない。半数位が、いつしか姿を消し、残った半数が夫婦単位で倍にふくれあがった。トータルすれば変化ないわけである。

やはり義理で来たと答えた半数近くの顔はなかった。そして夫婦喧嘩を基盤に押し出された人の方が多く残った。やはり、夫を押し出す力があつたのだから、当然支える力もあつたわけで、そうした底力が夫婦の学級にしてしまつたのかもしれない。

閉講式終了後、自主学級として存続させるかどうか、当然のように話題に上つた。学級に手慣れた大和撫子達のしわざである。彼女達にしてみれば、自主学級にしていくことがあたりまえで、それを前提に論することも日常であつた。

しかし男性側からまかつたがかった。こうした学級は「どこかに持っていける」のではないかと懸念してのことである。こうした懸念は、学級開設以前からあつたという。前時代的などという思いと、素朴な疑問に啞然としている女性達の様子と、真顔でうなづく男性達との差

はいったい何であつたのだろうか。やはり、たつた一〇回シリーズの学級では、その何たるかが理解できないと見るべきであろうか。はたまた、開設以前から抱きつけていた疑問が、ようやく外へ出せる基盤ができたと見るべきか。

討論のテーマを何かにしぼるのではなく、みんなの思っていることを出し合つていこう。そうすれば、どこかにもついていくこともいかれることもなく、学級は続けることができるのではないか。毎月当番を決めて、その人が話題の提供を行う。当番本人が話題提供者になつても、また、自分の興味のある話題について講師をお願いしても良いというシステムにした。俗にいう、接ぎ穂の話し合いである。

自主学級になつたのだから、父親家庭教育学級では固いので、愛称でもつけようという段になり、額の寄せ合いが始まつた。「雷学級」「おやじの会」、どうも今いちとこととしてしばしば沈黙の間。またいつもの「おやじ談議」が始まつた。最近では本当に権威がなくなつた。むかしのおやじはこわかつた。今こそどなるべきだ。そこで、ある学級生からボツリと「権威をとりもどそうたつて、単身赴任で子どもが大事と亭主が追いやられる時代ですわ。たまに帰ってくる、お父様どころか、おやじとも呼びやしない

い。おっ／＼いたかですよ」

その話を聞き、一同それでいこうと大賛成。何と自主学級の愛称は「いたか」で決定し、おやじの「おっ／＼いたか」と毎月土曜日の一回、「おっ／＼いたか」と仲間を呼ぶように集まろうということ。で「サタデイナイト・いたか」ということとに名前も付き、一人立ちを、女房の保護のもと始めたのである。

九——その後

自主学級になってから一年たった。その間学級生による話題提供は一環として、「教育論議」から大きくはずれようとはしなかったのも偶然であるろうか。

「高校生の性教育の現状」「地域の歴史」

「話し言葉と人間形成」「川崎のこどもの現状」「ヨーロッパ教育視察帰朝報告」等々、テーマは、さほどとびぬけない。

冗談に、単身赴任先の「すすきの」「十三」の対談をしますか、と話もですが、やはり、こども文化センターという公共の場で行っているということが原因であろうか、教育論議はつきることない。

「オヤジたちは良いよな。土曜の夜、みんな一杯飲みながら話ができてる。ましてこども文化センターでだぜ」「そらだよ。俺達にもやらせてヨ」高校生達の声である。冗談じゃない、酒を高校生に公共の場で飲ますわけにはいかんと目くじらを立てれば、彼らなりにも言い分がある。

別に飲ませろと言っているのではな

い。今の子どもは大体二〜三人、みんな長男・長女じゃないか。女の子は嫁に行くから良いとして、男はそうはいかない。ましてほとんどが長男なのだから、俺たちは親をみなくてはならない。親を見るのだから、家をもらうのは当然。だって、これから自分で家を建てるなどできないからね。そしたら、これからこの地域の主体者は俺達だ。

だから長男会を開催せよというのである。おやじから、子ども達へと地域は「健全」に移行している。こども文化センターは、大人文化センターだと言った子ども達が、高校生や大学生に育った今、未来の「おやじ」達が自分達のためにも学級を開催せよとの要求は、地域の輪廻を感じずにはいられない。この父親

家庭教育学級が、次の世代への土台となりうれば幸いであるし、たとえ、なりきれなくとも一石を地域に投じたことは間違いないであろう。

そして菅生こども文化センターでおこなっている「サタデイナイト・いたか」の試みは、地域を中心として更に地域再創造への過程であり、地域教育力再生への試みでもあったのではあるまいか。と同時に、そうした道に対して、行政の援助、住民自治との関係をも含み示唆しているとも思えるのである。

△元川崎市菅生こども文化センター・現川崎市平こども文化センター職員▽